

小晩課の定式

「スポタ」の日没前、打鐘の時至れば、打鐘者は聖務長の許に來りて祝福を受け、出でて小鐘を鳴らす。衆聖堂に集まりて、司祭始めて曰く、「我等の神は崇め讃めらる云云」。誦經者誦す、「アミン」、「我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す」。次に「天の王」、聖三祝文、「天に在す」の後に司祭高聲。其後誦經者常例の如く九時課を誦す。畢りて後司祭發放詞を誦せずして、直に晩課を始めて曰く、「我等の神は崇め讃めらる」。誦經者誦す、「來れ我等の王神に叩拜せん」、三次。次に晩課の聖詠、「我が靈よ、主を讃め揚げよ」を緩誦す。聖詠畢りて後、光榮、今も、「アリルイヤ」、三次。司祭聯禱を誦せずして、誦經者誦す、「主憐めよ」、三次。光榮、今も。直に「主よ、爾に籲ぶ」。四句を立てて主日の本調の讃頌三章を歌ふ、其第一は二次。光榮、今も、生神女讃詞。次に「穩なる光」。提綱、「主は王たり」、句、「主は能力を衣、又之を帯にせり」。復、「主は王たり」。次に「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」。直に挿句の讃頌、主日の一、又生神女の三を其附唱と共に歌ふ。光榮、今も、其生神女讃詞。次に「主宰よ、今爾の言に循ひて」。聖三祝文、「天に在す」の後に、主日の讃詞。光榮、今も、其生神女讃詞。次に司祭小聯禱を誦す、「神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐め、爾に祈る、聆き納れて憐めよ」。詠隊、「主憐めよ」、

小晩課の定式

一

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式

二

三次、司祭、「又吾が今上皇帝、皇后、皇太子、皇太子妃、及び皇族の爲に祈る」。詠隊、「主憐めよ」、三次。「又教會を司る至聖なる會院の爲に祈る」。詠隊、「主憐めよ」、三次。「又衆兄弟及び衆「ハリスティアニン」の爲に祈る」。詠隊、「主憐めよ」、三次。高聲、「蓋爾は仁慈にして人を愛する神なり」。次に「ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す」。并に小發放詞。

~~~~~

## 大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式

日没後暫くして打鐘者は聖務長の前に來りて祝福を受け、出でて大鐘を鳴らし、隨ひて連打す。此の時衆參集し、聖務者至聖所に入り、司祭は領帶及び祭袍を衣、輔祭は祭衣及び大帶を着す。司祭は聖寶座の前に立ち、香爐を執り、乳香を入れて、香爐の祝文を黙誦し、輔祭は蠟燭を執り、共に爐儀を聖寶座の四周に十字形に行ひ、又祭臺及び聖像の前に行ふ。但し爐儀を行ふ時は司祭及び輔祭首を垂れて禮拜するを例とす。次ぎて王門を啓きて升壇に出で、王門に向ひて立ち、輔祭は大帶を持ちたる手を舉げて、朗聲を以て誦す、「衆起てよ」。「君よ、祝讃せよ」。司祭王門に向ひて、香爐を舉げて十字形を畫し、高聲を以て誦す、「光榮は一性にして生命を施す分れざ

る聖三者に歸す、今も何時も世に」、詠隊「アミン」。司祭續ぎて高誦す、「來れ、我等の王神に叩拜せん」。「來れ、ハリストス我等の王神に叩拜俯伏せん」。「來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん」。終に最高聲を以て誦す、「來りて彼の前に叩拜俯伏せん」。詠隊直に第八調に依りて諧和の調を以て首誦聖詠を高唱す、「我が靈よ、主を讃め揚げよ」、及び附唱、「主よ、爾は崇め讃めらる。主我が神よ、爾は至りて大なり云云」。此の時司祭及び輔祭は序を逐ひて爐儀を右方の聖像、次に左方の聖像、及び堂内の諸聖像の前に行ひ、其後右左の詠隊及び衆人に對して行ふ。畢りて至聖所に入りて、王門を闔づ。詠隊が「皆智慧を以て作れり」、及び「光榮は爾萬物を造りし主に歸す」、と歌ふに及びて、司祭は<sup>エビトラヒリ</sup>領帶のまま北門より王門の前に出で、脱冠して立ち、光耀祝文を默誦す。聖詠畢りて後、司祭、若し輔祭あらば輔祭、大聯禱を誦す、「我等安和にして主に禱らん」。聯禱畢りて後高聲「蓋凡そ光榮尊貴伏拜は」。次に聖詠經の第一「カフィズマ」、「悪人の謀に行かず」を誦文し、第一の<sup>アンティフォン</sup>倡和詞を第八調に据りて、第二及び第三の<sup>アンティフォン</sup>倡和詞を本日の調に据りて歌ふ。毎<sup>アンティフォン</sup>倡和詞の後に小聯禱、及び高聲第一の<sup>アンティフォン</sup>倡和詞の後には「蓋權柄及び國と權能と光榮」、第二の<sup>アンティフォン</sup>倡和詞の後には「蓋爾は善にして人を愛する神なり」、第三の<sup>アンティフォン</sup>倡和詞の後には「蓋

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式

三

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式

四

爾は我等の神なり」。聖詠誦文畢りて後、詠隊八調經の遇ふ所の調に据りて「主よ、爾に籲ぶ」を歌ふ。此の時司祭或は輔祭常例の如く爐儀を行ふ。詠隊は、「我が靈を獄より引き出して」より、十句を立てて、本調の主日の<sup>ステイヒラ</sup>讚頌三、アナトリイの四、及び月課經の聖人の四を歌ふ。光榮は、若し之あらば、聖人の、若しなくば、光榮、今も、本調の生神女讚詞。光榮を歌ひ始むる時、司祭<sup>フェロン</sup>祭袍を衣、聖門を啓きて、聖入を行ふ、即火を點じたる二基の燭臺前行し、輔祭は香爐を執りて之に隨ひ、司祭は祭袍の前を下垂して之に次ぎ、共に北門を出じ。司祭は正面に聖門に向ひて立ち、輔祭は司祭の右方に側面して立ち、右手の三指を以て<sup>オラリ</sup>大帶を執り、少しく首を司祭の方に傾けて、低聲を以て唯司祭のみ聞くばかりに誦す、「主に禱らん」。司祭は祝文、「萬有の主宰よ、我等晩と朝と」を默誦す。祝文畢りて首を舉ぐるに、輔祭は<sup>オラリ</sup>三指に大帶を執れる右手を以て東方を指して、司祭に向ひて言ふ、「君よ、聖入に祝福せよ」。司祭東方に十字架を畫して曰く、「主よ爾の聖者の入は祝福せらる」。次に輔祭離れて、前面の右左にある救世主及び生神女の聖像の前に爐儀を行ひ、又司祭に向ひて之を行ひて、故の位に立ちて、歌の終るを待つ。畢りて後輔祭聖門の中央に立ち、香爐を舉げて十字架を畫して高誦す、「睿智、肅みて立て」。詠隊は「聖にして福たる常生なる天の父の聖なる光榮の穩なる光」を歌ふ。此の時燭を執る者進みて聖門の側に至り、輔祭は<sup>アルタリ</sup>高壇に入り、聖寶座の四周に爐儀を行ひ、司祭は聖門の前に躬拜し、右左の聖像に接吻して、内に入る。「穩なる光」を歌ひ畢るに臨みて、司祭及び輔祭は聖寶座の東方に轉じて、衆に向ひて立ち輔祭曰く、「謹みて聽くべし」。司祭衆に祝福して

曰く、「衆人に平安」。輔祭又曰く、「睿智、謹みて聴くべし。<sup>ボロキメン</sup>提綱、主は王たり、彼は威嚴を衣たり」。詠隊之を歌ふ。輔祭、句、「主は能力を衣、又之を帶にせり」。句、「故に世界は堅固にして動かざらん」。句、「主よ、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん」。復、「主は王たり」。詠隊其後半句を歌ひ畢る時輔祭聖門を閉し、北門より出でて聯祷を誦す、「我等皆靈を全うして曰はん」。司祭高聲を誦す。其後誦經者「主よ、我等を守り、罪なくして此の晩」を誦す。畢りて後輔祭又聯祷、「我等主の前に吾が晩の祷を増し加へん」。司祭高聲、「蓋爾は善にして人を愛する神なり」。次に、「衆人に平安」。輔祭、「我等の首を主に屈めん」。司祭祝文を黙誦し、次に高聲す、「願はくは爾父と子と聖神の國の権柄」。次ぎて聖堂或は祭日の讃頌<sup>ステイヒラ</sup>を歌ひ、前院に出でて熱衷公<sup>リテイヤ</sup>祷を行ふ。即司祭及び香爐を執る輔祭共に北門より出で、幫堂者二人各燭臺一基を持して之に先だつ。前院に至りて、輔祭は聖像の前に爐儀を行ひ、又司祭

大晩課及び主日の早課即徹夜祷の定式 五

大晩課及び主日の早課即徹夜祷の定式 六

及び詠隊に向ひて之を行ひて、司祭の前に其右方に立つ。<sup>ステイヒラ</sup>讃頌及び光榮、今も、生神女讃詞畢りて後、輔祭高聲を以て左の祝文を誦す、「神よ、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降し給へ、慈憐と洪恩とを以て爾の世界に臨み云云」、終に至る。詠隊、「主憐めよ」、四十次。輔祭、「又我が今上皇帝の爲、其權力、勝利云云」。「又我が皇后、皇太子、皇太子妃、及び皇族の爲に祷る」。詠隊、「主憐めよ」、三十次。輔祭、「又教會を司る至聖なる會院<sup>シノド</sup>云云」。詠隊、「主憐めよ」、八次、「又此の都邑（此の聖修道院）、凡の都邑と地方が云云」。詠隊、「主憐めよ」、三次。「又主神が我等罪なる者の祷の聲を聆き納れて、我等を憐むが爲に祷る」。詠隊、「主憐めよ」、三次。次ぎて司祭高誦して曰く、「神我が救世主、地の四極云云」。詠隊、「アミン」。又曰く、「衆人に平安」。輔祭、「我等の首を主に屈めん」。衆人首を俯して、司祭朗聲を以て祝文を誦す、「主宰大仁慈なる主イイスス ハリストス我等の神よ」。終りて後詠隊、「アミン」。次に主日の挿句<sup>くづけ</sup>の讃頌<sup>ステイヒラ</sup>を歌ふ。之を歌ひ始むる時堂に入る、燭を執る者前行す。讃頌には左の句を附唱す、第一句、「主は王たり、彼は威嚴を衣たり」。第二句、「故に世界は堅固にして動かざらん」。第三句、「主よ、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん」。光榮、今も、生神女讃詞。歌ふ時堂中に案を備へ、其傍に燭臺を建て、盤上に祝福の爲に五餅を供し、又麦、其右に橄欖油、其左に葡萄酒を盛れる器各一を置く。右歌ひ畢りて誦經者誦す、「主宰よ、今爾の言に循ひ」。聖三祝文。「天に在す」の後に司祭高聲、「蓋國と權能と光榮」。詠隊、生神女の發放讃詞、「生神童貞女よ、慶べよ」、を第四調に据りて歌ふこと三次。此の時輔祭は司祭より祝福を受けて、案の四周に爐儀を行ひ、及び司祭に向ひて、後復案の前に行ふ。次ぎて曰く、「主に祷らん」。司祭一の餅を取り、此を持ちて他の餅に聖號を畫し、高聲を以て祝文、「主イイスス ハリストス我等の神、五餅に福を降し」を誦す。但し「爾親ら云云福を降し」と誦する時、右手を以て供する所の餅、麥、葡萄酒、油を歴指す。祝文畢りて後

詠隊、「アミン」、「願はくは主の名は崇め讃められて今より世世に至らん」、第四調に据りて歌ふこと三次。次に誦經者第三十三聖詠、「我何の時に主を讃め揚げん」を誦して、十一節、「唯主を尋ぬる者は何の幸福にも缺くるなし」に至る。司祭進みて王門の前に至り、西嚮して立ち、聖詠の畢るに及びて、衆に祝福して曰く、「願はくは主の降福は其恩寵と仁愛」。詠隊、「アミン」。打鐘者大鐘を鳴らし、隨ひて連打して、早課の始まるを報ず。誦經者誦し始む、「至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり」、三次。次に「主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げん」、二次。是に於て緩和の聲を以て六聖詠を誦す。三聖詠の後に、光榮、今も、「アリルイヤ」三次。「主憐めよ」、三次。光榮、今も、續ぎて「主吾が救の神

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式

七

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式

八

よ、我晝夜爾の前に籲ぶ、云云」。其時司祭脱冠して至聖所より出で、聖門の前に立ちて、早課祝文を黙誦す。六聖詠畢りて、光榮、今もの後に、輔祭大聯禱を誦す、「我等安和にして主に禱らん」。司祭の高聲の後に、輔祭朗誦す、「主は神なり、我等を照せり、云云」、及び其句。詠隊本調に据りて之を歌ふ。畢りて、主日の讚詞を歌ふこと二次。光榮、若し之あらば、聖人の讚詞、今も、其調に据りて生神女讚詞。若しなくば、光榮、今も、本調の生神女讚詞。直に詠隊歌ふ、「主憐めよ」、三次。「光榮は父と子と聖神に歸す」。誦經者、「今も何時も世世に、アミン」、乃聖詠經の「カフイズマ」を誦文す、「主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ云云」(第二の「カフイズマ」)。誦文畢りて後、輔祭聖門の前に至りて小聯禱を誦す、司祭高聲常例の如し。次に主日の坐誦讚詞を誦す、前のには句なし。次に句、「主我が神よ、起きて爾の手を挙げよ、苦しめらるる者を永く忘るる毋れ」。後の坐誦讚詞、光榮、今も、生神女讚詞。其後福音經講讀の例あり。次に又「カフイズマ」の誦文、及び第二の坐誦讚詞。句、「主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇迹を傳へん」。光榮、今も、其生神女讚詞。及び誦讀。其後「ネポロチニ」を歌ふ、第五調。歌ふ時司祭爐儀を行ふ。次に諸讚詞、「救世主よ、天使の軍は云云」。本調の應答歌及び誦讀。其後本調の品第詞。之を歌ふ時、打鐘者出て鐘を鳴らして、福音經誦讀の時を報ず。輔祭誦す、「謹みて聴くべし。睿智。提綱」。乃主日の本調の提綱を誦す。之を歌ひ畢りて後輔祭曰く、「主に禱らん」。司祭、「蓋我が神よ爾は聖にして云云」。詠隊、「アミン」。輔祭、「凡そ呼吸ある者は主を讃め揚げよ」。句、「神を其聖所に讃め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讃め揚げよ」。次に輔祭誦す、「我等に聖福音經を聴くを賜ふを主神に禱らん」。詠隊、「主憐めよ」、三次。輔祭、「睿智、肅みて立て、聖福音經を聴くべし」。司祭、「衆人に平安」。詠隊、「爾の神にも」。司祭、「(某)に因る聖福音經の讀」。詠隊、「主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す」。輔祭、「謹みて聴くべし」。是に於て司祭主日の順序の福音經を讀む。畢りて後、詠隊復歌ふ、「主よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す」。次に「ハリストスの復活を見て云云」を歌ふ。畢りて後、誦經者第五十

聖詠を誦す。此の時司祭は福音經を胷前に捧持して聖門を出づ。二基の燭臺を持する者前行す。司祭堂中に至り、福音經を胷前に捧持して立ち、或は之を堂中に設けたる聖案に置き、二基の燭臺を其側に立つ。衆相繼ぎて福音經の前に來りて再拜し、之に接吻して又一拜す。(此の拜は地に至るにあらず、即小拜にして、手を下して其指の地に達するばかりに首を垂るるなり。蓋主日又は主宰の祭日及び全五旬期には膝を屈めざるを規とす)。福音經の前に拜して後、司祭に小拜を爲して、各其處に復る。

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式 九

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式 一〇

第五十聖詠畢りて後、詠隊、光榮、「使徒の祈禱に依りて云云」。今も、「生神女の祈禱に依りて云云」。次に歌ふ、「神よ、爾の大なる憐に因りて云云」、及び主日の讚頌、第六調、「預め言ひし如くイイスス墓より復活して云云」。衆が聖福音經に接吻し畢りて後、司祭之を舉げて、衆に向ひて聖號を畫して、至聖所に入る。輔祭は其常位に立ちて祝文を誦す、「神よ、爾の民を救ひ云云」。詠隊「主憐めよ」、十二次。司祭高聲、「爾が獨生子の仁慈と慈憐云云」。「アミン」の後に詠隊主日の規程を始む。復活の規程、「イルモス」と共に四章、十字架復活の、三章、生神女の、三章及び月課經の、四章。第一の讚詞に附唱、「主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す」。次に主日の歌頌の句を附唱す(「イルモロギイ」に載す)。第三歌頌の後に、輔祭聖門の前に立ちて小聯禱を誦す。司祭は高壇の内に在りて高聲を誦す、「蓋爾は我等の神なり云云」。次に月課經の聖人の小讚詞、及び坐誦讚詞。第六歌頌の後に小聯禱、及び高聲「蓋爾は平安の王云云」。次に、復活の小讚詞、及び同讚詞。其後祭日略解を読む。第八歌頌の終に至りて、衆一拜を爲して、詠隊歌ふ、「我等主を讃め、崇め、伏し拜みて、世世に歌ひ讃めん」。次に第八歌頌の「イルモス」、共頌を歌ふ。輔祭、至聖所に爐儀を行ひて、出でて朗誦す、「生神女光の母を讃歌を以て讃め揚げん」。詠隊高聲を以て第九歌頌を歌ふ、「我が靈は主を崇め云云」、及び「ヘルウィムより尊く」、句毎に小拜を爲す。輔祭全堂及び衆に向ひて爐儀を行ひ、之を終へ、香爐を還して、第九歌頌の後に小聯禱を誦す。司祭高聲、「蓋天の衆軍爾を讃揚す云云」。次に輔祭朗誦す、「主我等の神は聖なり」。詠隊本調に据りて之を歌ふ。第一句、「蓋主我等の神は聖なり」。第二句、「我等の神は衆人の上に在り」。其後主日の光耀歌を誦す。光榮、若し之あらば、聖人の。今も、主日の生神女讚詞。「凡そ呼吸ある者」、本日の調に、八句を立てて八調經の主日の讚頌四章、及びアナトリイの四章を歌ふ。兩詠隊列を合せて「凡そ呼吸ある者」に又左の句を附唱す、第一句、「主我が神よ、起きて、爾の手を挙げよ、苦しめらるる者を永く忘るる母れ」。第二句、「主よ、我心を盡して爾を讃め揚げ、爾が悉くの奇蹟を傳へん」。光榮、福音の順序の讚頌。今も、生神女讚詞、第二調、「生神童貞女よ、爾は至りて讚美たる者なり」。大詠頌。次に復活の讚詞、二の中に一、或は第一調の、「今救は世界に及べり云云」、或は第二調の、「主よ、爾は墓より復活して云云」。輔祭聯禱、「神よ、爾の大なる憐に因りて云云」。司祭高聲(蓋爾は慈

憐にして人を愛する神なり云云」。又聯禱、「我等主の前に吾が朝の禱を増し加へん」。高聲、「蓋爾は仁慈と慈憐と云云」。司祭、「衆人に平安」。詠隊、「爾の神にも」。輔祭、「我等の首を主に屈めん」。司祭祝文を黙誦す。次に高声聲、「蓋我が神よ、我等を憐みて云云」。其後輔祭、「睿智」。詠隊、「祝讃せよ」。司祭、「永在の主ハリストス我

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式 一一

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式 一二

等の神は恒に崇め讃めらる云云」。詠隊、「アミン」。「神よ、我が今上皇帝云云」。司祭、「至聖なる生神女よ云云」。詠隊、「ヘルウィムより尊く云云」。其他常例の如し、及び發放詞。并に萬壽詞を歌ふ。第一時課に主日の讃詞。光榮、若し之あらば、聖人の、若しなくば、今も、時課の生神女讃詞。「天に在す」の後に主日の小讃詞。并に最後の發放詞。

**聖體禮儀**には、八調經の眞福詞、八句を立つ。聖入の後に主日の讃詞、次に本堂の、并に若し之あらば、本日の聖人の。小讃詞は主日の、及び本堂の。光榮、若し之一あらば、聖人の。今も、生神女の堂の、若しなくば、今も、小讃詞、「ハリストス等」の辱を得ざる轉達云云」。ハリストスの堂の讃詞及び小讃詞は主日の聖體禮儀に於て年中之を誦せず、蓋主日の讃詞及び小讃詞は常に首として之を誦す。提綱、使徒の誦讀、アリルイヤ、及び福音經の誦讀は本調の、及び若し之あらば、聖人の。領聖詞、「天より主を讃め揚げよ云云」、次に若し之あらば、聖人の。

**左の事をも知るべし**。徹夜禱に多燭詞ありて、聖詠、「主の名を讃め揚げよ云云」、及び「主を讃榮せよ云云」を歌ふ時には、其時堂中に聖案を設け、其上に主宰、或は生神女、或は聖人の祭日の聖像を安置す。至聖所の内に聖務長及び衆聖務者祭袍を衣、開きたる王門より高壇を出でて、聖案の兩側に立つ。聖務長は衆聖務者に蠟燭を分與し、其後香爐を執り、輔祭火を點じたる蠟燭を持ちて之に先だちて、共に先じ聖案の上にある聖像を四周して爐儀を行ひ、次に高壇に、往きて、彼處に聖寶座及び全高壇に爐儀を行ひ、出でて堂中の諸聖像の前に行ひ、次に兩側の聖務者、及び兩詠隊、并に堂中に立てる衆民に向ひて行ひ、又聖門の前、及び唯ハリストスと生神女との二聖像の前、終に聖案にある聖像の前に行ふ。此の時詠隊讃揚詞をダウィドの聖詠の拔萃の句と共に歌ふ。常例の如く歌ひ畢りて後、輔祭小聯禱を誦す。次に坐誦讃詞を歌ふ。衆聖務者聖高壇に入りて祭服を脱ぐ、唯當番の司祭は祭服のまま留まる、福音經を讀む爲なり。

~~~~~

大晩課及び主日の早課即徹夜禱の定式 一三

主日に徹夜禱ある聖人の祭日の事 一四

主日に當たる所の徹夜禱ある聖人の祭日の事

「スボタ」の晩、小晩課に、「主よ、爾に籲ぶ」に主日の讃頌四章。光榮、聖人の。
今も、小晩課の本調の生神女讃詞。挿句には主日の一章、及び聖人の大晩課の挿句の
讃頌、其附唱と共に。光榮、聖人の。今も、生神女讃詞、同調に据る。「主宰よ、今
爾の言に循ひて云云」、及び「天に在す」の後に主日の讃詞。光榮、聖人の。今も、
第一の生神女讃詞、聖人の讃詞の調に据る。

大晩課には、首誦聖詠、其附唱と共に。常例の誦文の後に、「主よ、爾に籲ぶ」に十
句を立てて主日の讃頌三章、アナトリイの一章及び聖人の六章を歌ふ。光榮、聖人
の。今も、本調の第一の生神女讃詞。聖入。聖人の喩言三篇。熱衷公禱には本堂の讃頌、
及び聖人の諸讃頌。光榮、聖人の。今も、主日に歌ふ所の挿句の生神女讃詞、同調
に据る。挿句には主日の讃頌。光榮、聖人の。今も、生神女讃詞、同調に据る。餅
を祝福するに讃詞、「生神童貞女よ、慶べよ云云」、二次、及び聖人の、一次。并に誦
讀。早課には「主は神なり」に主日の讃詞二次。光榮、聖人の。今も、第一の生神女
讃詞、聖人の讃詞の調に据る。第一の「カフィズマ」の後に主日の坐誦讃詞及び第二
の、附唱と共に、并に本調の第一の生神女讃詞。福音經の講讀。第二の「カフィズマ」
の後に主日の坐誦讃詞、及び其生神女讃詞。并に誦讀。多燭詞の後に諸讃詞、「救世
主よ、天使の軍は云云」。次に聖人の二坐誦讃詞。光榮、多燭詞の坐誦讃詞。今も、
其生神女讃詞。并に聖人の誦讀。本調の品第詞、及び提綱。「凡そ呼吸ある者」。主
日の早課の福音經。「ハリストスの復活を見て」、及び第五十聖詠、并に福音經に接
吻すること常例の如し。光榮、「使徒の祈禱に依りて云云」。今も「生神女の祈禱に依
りて云云」。復活の讃頌、及び其他。規程は主日の、「イルモス」と共に四章、生神女
の二章、及び聖人の八章。共頌は規定の如し。第三歌頌の後に、聖人の小讃詞、及
び同讃詞、拜に其坐誦讃詞二次。光榮、今も、生神女讃詞。誦讀。第六歌頌の後に主
日の小讃詞、及び同讃詞。祭日略解を讀む。第九歌頌には「ヘルワイムより尊く」を
歌ふ。光耀歌は主日の。光榮、聖人の。今も、主日の生神女讃詞。「凡そ呼吸ある者」
に主日の讃頌四、及び聖人の四、其光榮のと共に、其晩課の附唱と共に。光榮、福
音の讃頌。今も、「生神童貞女よ、爾は至りて讚美たる者なり云云」。大詠頌。聖三祝
文の後に復活の讃詞のみ。聯禱、及び發放詞。第一時課。此の時課には主日の讃詞、
光榮、聖人の、今も、時課の生神女讃詞。「天に在す」の後に聖人の小讃詞。其他の
時課には小讃詞を相更へて誦す。

聖體禮儀には、眞福詞は本調の六章、及び聖人の第三歌頌四章。聖入の後に、主日の
讃詞、及び生神女の堂ならば、本堂の讃詞、并に聖人の讃詞。主日の小讃詞。光榮、

主日に徹夜禱ある聖人の祭日の事 一五

主日に多燭詞ある聖人の祭日の事 一六

聖人の。今も、生神女の堂の。若し之ならずば、今も「ハリストティアニン等の辱を得

ざる轉達云云」。(諸聖人の堂の讃詞及び小讃詞は此等の日に誦せず)。提綱、使徒の誦讀、ア ril イヤ、福音經の誦讀、及び領聖詞は、先に主日の、次に聖人の。

~~~~~

## 主日に當る所の多燭詞ある聖人の祭日の事

「スボタ」の晩に小晩課を歌ふことは、前に記しし徹夜禱の聖人の主日の如し。

大晩課には、「カフィズマ」の後に「主よ、爾に籲ぶ」に、主日の讃頌三、アナトリイの一、聖人の六。光榮、聖人の。今も、本調の第一の生神女讃詞。聖入、本日の提綱、及び聖人の喩言三篇、熱衷公禱には本堂の讃頌、及び若し之あらば、聖人の。光榮、聖人の。今も、第一の生神女讃詞、聖人の調に据る。挿句には本調の主日の讃頌。光榮、聖人の。今も、生神女讃詞、聖人の調に据る。餅を祝福するに讃詞、「生神童貞女よ、慶べよ云云」、三次。

早課には、「主は神なり」に主日の讃詞、二次。光榮、聖人の。今も、主日の生神女讃詞、聖人の讃詞の調に据る。「カフィズマ」の後に主日の坐誦讃詞、其生神女讃詞と共に。福音の講讀。聖人の多燭詞、及び聖人の二坐誦讃詞、各一次。光榮、聖人の多燭詞の坐誦讃詞。今も、生神女讃詞。聖人の誦讀。本調の品第詞、及び提綱。主日の早課の福音經。「ハリストスの復活を見て云云」。第五十聖詠。主日の讃頌。規程は主日の、「イルモス」と共に四章、十字架復活の二章、生神女の二章、及び聖人の六章。若し聖人に二規程あらば、共に八章、其時は十字架復活のをを用いず。第三歌頌の後に小讃詞及び同讃詞、又坐誦讃詞は聖人の、坐誦讃詞は二次。光榮、今も、其生神女讃詞。并に誦讀。第六歌頌の後に主日の小讃詞及び同讃詞。并に祭日略解を讀む。第九歌頌の後に「ヘルウィムより尊く」を歌ふ。主日の光耀歌。光榮、聖人の。今も、本調の主日の生神女讃詞。「凡そ呼吸ある者」に本調の主日の讃頌四章、及び聖人の四章、光榮のと共に、其晩課の附唱と共に。光榮、福音の讃頌。今も、「生神童貞女よ、爾は至りて讃美たる者なり云云」。大詠頌。復活の讃詞のみ。聯禱、及び發放詞。第一時課。此の時課には主日の讃詞。光榮、聖人の。今も、時課の生神女讃詞。「天に在す」の後に聖人小讃詞。其他の時課には小讃詞を相更へて誦す。

聖體禮儀には、本調の眞福詞六章、及び聖人の第三歌頌四章。聖入の後に讃詞及び小讃詞、右徹夜禱ある聖人の事の章に記ししが如し。之に聖人の堂の讃詞及び小讃詞を附加す。

~~~~~


主日に當る所の多燭詞なくして讃頌六章ある聖人の事

「スボタ」の晩、大晩課に、「カフィズマ」の後、「主よ、爾に籲ぶ」に、主日の讃頌^{ステイヒラ}三、アナトリイ^{ボロキメン}の三、及び聖人の四。光榮、聖人の。今も、本調の第一の生神女讃詞。聖入。本日の提綱及び聯禱、「我等皆靈を全うして曰はん云云」。熱衷公禱に本堂の讃頌^{ステイヒラ}。光榮、若し之あらば、聖人の。若しなくば、光榮、今も、生神女讃詞。并に熱衷公禱の常例の祝文。挿句に主日の讃頌^{ステイヒラ}。光榮、聖人の。今も、主日の生神女讃詞、聖人の調に据る。其他晩課の常例の如し。

早課には、「主は神なり」に主日の讃詞二次。光榮、聖人の。今も、第一の生神女讃詞、聖人の讃詞の調に据る、及び其他主日の式、規程に至る。規程は主日の、「イルモス」と共に四章、十字架復活の二章、生神女の二章、及び聖人の六章。共頌は規定の如し。第三歌頌の後に小讃詞及び同讃詞、并に坐誦讃詞、聖人の、坐誦讃詞は二次、次に其生神女讃詞。并に聖人の誦讀。第六歌頌の後に主日の小讃詞及び同讃詞。并に祭日略解を読む。第九歌頌に「ヘルウィムより尊く」を歌ふ。主日の光耀歌。光榮、聖人の。今も、本調の主日の生神女讃詞。「凡そ呼吸ある者」に主日の讃頌^{ステイヒラ}四章、及び聖人の四章、光榮と共に。若し聖人に「凡そ呼吸ある者」に讃頌^{ステイヒラ}なくば、主日の讃頌を歌ふこと常例の如し。光榮、福音の讃頌。今も、「生神童貞女よ、爾は至りて讃美たる者なり云云」。大詠頌。復活の讃詞のみ。二聯禱及び、發放詞。第一時課。此の時課には主日の讃詞。光榮、聖人の。今も、時課の生神女讃詞。聖三祝文の後に主日の小讃詞、其他、并に發放詞。

聖體禮儀には、眞福詞、本調の六章、及び聖人の第三歌頌の四章。聖入の後に主日の讃詞、又生神女の堂のある處には其堂の讃詞、或は聖人の堂の、後に本日の聖人の讃詞。若し他の聖人ありて、之に讃詞あらば、其讃詞をも誦すべし。次に主日及び本堂の小讃詞。光榮、本日の聖人の小讃詞。今も、生神女の、其堂の。若し生神女の堂にあらずば、光榮、本日の聖人の小讃詞。今も、「ハリスティアニン等の辱を得ざる轉達云云」。提綱、使徒の誦讀、ア ril イヤ、福音經の誦讀、及び領聖詞は、先に主日の、後に聖人の。

~~~~~

知るべし、小修道院、及び民間の聖堂に於て主日に、徹夜禱を行はざる處、或は首長の行ふを願はざる處には、適當の時刻に大晩課又は早課を行ふこと左の如し

小修道院及び民間の聖堂に主日に大晩課又は早課を行ふ事

一九

小修道院及び民間の聖堂に主日に大晩課又は早課を行ふ事

二〇

「スボタ」の晩に、第九時課の發放の後、司祭王門の前に出でて誦す、「我等の神は、

恒に崇め讃めらる云云」。其時王門の幕は啓かる。誦經者誦す、「來れ、我等の王神に叩拜せん云云」、及び首誦聖詠。司祭王門の前に立ち、脱冠して光耀祝文を默誦す。首誦聖詠畢りて後、司祭、若し之あらば、輔祭聯禱を誦す、次に高聲。其他徹夜禱の大晩課に記ししが如し。唯此には聯禱、「我等主の前に吾が晩の禱を増し加へん」の後、直に主日の挿句くづけの讃頌ステイセラを歌ふ。之を終へて、誦經者誦す、「主宰よ、今爾の言に循ひて云云」。聖三祝文、其他。司祭聖高壇アルタリの内に在りて高誦す、「蓋國と権能と光榮云云」。詠隊發放讃詞トロバリを歌ふ、常例の如し。輔祭外にハリストス救世主の聖像の前に立ちて高誦す、「睿智」。詠隊、「祝讃せよ」。司祭内より誦す、「永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讃めらる云云」。詠隊、「神よ、我が今上皇帝云云」。司祭、「至聖なる生神女よ、我等を救ひ給へ」。詠隊、「ヘルウィムより尊く」。司祭、「ハリストス神我等の恃よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す」。詠隊、光榮、今も、「主憐めよ」、三次、福を降せ。司祭は聖門を啓き、祭袍を下垂して、輔祭が外に右方に大帶を常の如く執りて立てるに、本日に適ふ發放詞を誦す。其後萬壽詞。

夕餐已に畢り、打鐘者聖務長より祝福を受けて、小鐘を鳴らし、兄弟參集す。當番の司祭始めて後、晩堂課を規程と共に歌ふ、常の如し。常例の發放の後、聖務長誦す、「主イイスス ハリストス我等の神よ、諸聖神父の祈禱に依りて我等を憐めよ」。兄弟堂を出づる時、聖務長に拜して、之に祝福并に赦罪を請ふ。次に聖務長は之を拜して、自も彼等に赦罪を請ふ。

朝には、打鐘者常の如く鐘を鳴らし、衆集れるに、司祭夜半課を始めて誦す、「我等の神は恒に崇め讃めらる云云」。誦經者誦す、「我等の神よ、光榮は爾に歸す、光榮は爾に歸す」。「天の王云云」。「聖三祝文」。「天に在す」の後に「主憐めよ」、十二次。「來れ、我等の王神に叩拜せん」、三次、及び第五十聖詠。次に敬虔と傷感とを以て聖三者の規程を歌ふ。畢りて後聖三者讃詞を歌ふ、即「爾神言を讃榮するは誠に當れり云云」、其他の諸讃詞カノン。次に聖三祝文トロバリ。「天に在す」の後に本調の應答歌イバコイ。「主憐めよ」、四十次。光榮、今も、「ヘルウィムより尊く」。司祭高聲、「神よ、我等に恩を被らせ云云」。并に祝文を誦す、「全能にして生を施し、光を賜ふ聖なる三者云云」。次に發放詞及び常例の赦罪。司祭聯禱を誦す、「吾が今上皇帝云云」。詠隊緩唱す、「主憐めよ」。已に畢りて聖務長誦す、「主イイスス ハリストス我等の神よ、吾が諸聖神父の祈禱に依りて我等を憐めよ」。發放の後、司祭聖高壇アルタリに入り、幫堂者より備へられたる香爐を取り、之に乳香を入れて、常例の香爐の祝文を誦し、王門の幕を啓きて、聖寶座の前に立ち、香爐を舉げ、十字架を畫して、早課を始めて曰く、「我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に」。乃聖寶座の四周及び全高壇アルタリに爐儀を行ひ、次に北門より出でて、諸聖像及び衆の前に行ふこと常の如し。誦經者、「我等の神は恒

小修道院及び民間の聖堂に主日に大晩課又は早課を行ふ事 二一

小修道院及び民間の聖堂に主日に大晩課又は早課を行ふ事 二二

に崇め讃めらる云云」の後に誦す、「アミン」。「來れ、我等の王神に云云」、及び常例

の聖詠、「願はくは主は憂の日に於て爾に聴き云云」、及び「主よ、王は爾の力を楽しみ云云」。聖三祝文、「天に在す」、(誦經者及び司祭は注意すべし、「蓋國と権能云云」を言ふ時、司祭は高壇アルタリに在らずして、堂中に在るべし)。次に讃詞、「主よ、爾の民を救ひ云云」、其他。司祭復聖像の前に爐儀を行ひ、畢りて南門より聖高壇トロバリに入り、香爐を持ちて聖寶座の前に立ちて聯祷を誦す、「神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ云云」、其他。高聲、「蓋爾は仁慈にして人を愛する神なり云云」。詠隊、「アミン」。神父よ、主の名を以て祝讃せよ。是に於て司祭香爐を舉げて聖寶座の前に十字架を畫して、高聲を以て誦す。

光榮は一性にして、生命を施す、分れざる聖三者に歸す、今も何時も世世に。

詠隊、「アミン」。誦經者誦す、「至高には光榮神に歸し云云」。六聖詠常例の如し。司祭香爐を還して其本位に立ち、誦經者が三聖詠畢りて、「主吾が救の神よ」と誦し始むる時、王門の前に出でて、早課祝文を黙誦す。其後常例の如く聯祷。其他終に至るまで、徹夜祷リトウルギヤの早課に記ししが如し。

第一時課、及び聖體禮儀。

~~~~~